

【CFNM & 嫉妬勃起NTR】

水泳部エロマネ彼女 ～幼馴染が男子更衣室でチンポを見て、宴会でフェラし、王様ゲームで挿入されるまで～

第一章 浜松の水泳教室(小学校時代)

浜松市。遠州灘から吹きつける潮風が、少し湿った空気を運んでくる町。

如月壮太と森井有紀は、同じ学年だった。だが、通っていた小学校は違った。壮太は市内の北の方にある公立小学校、有紀は少し南に位置する別の公立小学校。通学路も、給食の味も、担任の先生の顔も、教室の掲示物も、まったく重ならない。クラスメイトの名前すら知らない。それでも二人は「同級生」だった。なぜなら、放課後になると、同じ場所に向かうからである。

本格的な選手育成を謳う、市内で最も厳しいと言われた水泳教室。

小学三年の春、壮太は母親に連れられてその教室の門をくぐった。入口の看板には「結果を出せ。出せない者は去れ」とまでは書いていなかったが、空気がすでにそれを物語っていた。プールサイドに並ぶ子どもたちの顔を見渡したとき、隣の列にいた女の子と目が合った。黒髪をきれいに結び、目が大きくて、少し緊張したような表情を浮かべている。それが森井有紀だった。

「……あなたも？」

有紀が小さく声をかけてきた。声は澄んでいて、少しだけ上ずっていた。壮太は「うん」と頷いただけで、それ以上言葉が出なかった。初めて会ったのに、なぜか懐かしいような気がした。後から思うと、それは運命のようなものだったのかもしれない。だが当時の彼は、ただ「この子、きれいな目をしてるな」と思っただけだった。

教室の方針は明確だった。選手を育てること。結果を出すこと。それ以外は、ほとんど顧みられなかった。特に男子への扱いは、容赦がなかった。コーチは元実業団の選手で、口より先に拳が飛んでくるタイプだった。

「タイムが落ちた奴は罰だ！ 何やってんだ、この野郎！」

怒声が、毎日のようにプールサイドに響いた。拳で肩や尻を叩かれるのは日常茶飯事。練習中に少しでも集中が切れた瞬間、すぐに呼び出され、厳しい言葉と一緒に体罰が飛んできた。男子たちはそれを「当たり前」として受け入れていた。泣けばさらに叩かれ、言い訳をすれば「甘い！」と一喝された。

そして、もっと恥ずかしかった罰があった。

全裸で、女子の前に立たされること。

更衣室の隅で服を全部脱がされ、プールサイドに引き出される。まだ幼い体が、冷たい空気に晒される。股間を両手で隠そうとしても、「隠すな！ 罰だぞ！」と怒鳴られて、手が離される。女子たちは練習を中断して、その光景を見ることになる。有紀も、何度もそれを見た。

同級生の男の子が、真っ赤な顔をして震えている。脚ががくがくと揺れ、視線を伏せようとしてもコーチに「顔を上げろ」と命じられる。有紀は最初、視線を逸らそうとした。耳まで真っ赤になり、胸の辺りが熱くなるのを感じた。でも、教室の空気がそれを許さなかった。先輩の女子たちが「見なさい。それが罰だし、見ないと私たちが怒られるよ」と静かに言い、彼女も仕方なく目を向けた。男の子の小さな体、まだ発達しきっていない股間、羞恥に歪む顔。それを見るたびに、有紀の中で「この教室では、こういうことが普通なんだ」という感覚が少しずつ積み重なっていった。

壮太も、何度もその罰を受けていた。最初は小学四年の秋、タイムが悪く、コーチの怒りを買った夜だった。

その日の練習は、最初からついていけなかった。疲れが溜まっていたのか、集中力が途切れ、ターンのタイミングが遅れ、タイムが大きく落ちた。コーチの顔が歪み、「如月！ 出てこい！」と怒鳴られた。更衣室に連れて行かれ、そこで「全部脱げ」と言われた。最初は抵抗したが、コーチの拳が肩に食い込み、結局従った。水着を脱ぎ、全裸になる。冷たい空気が肌に触れた瞬間、羞恥で頭が真っ白になった。

プールサイドに引き出されたとき、同級生の女子や年上・年下の女子、そして有紀も自分を見ているのがわかった。彼女の視線が、自分の体をゆっくりとなぞっている気がした。脚、腹、そして股間。彼女の目が、そこに留まっているのがわかった。壮太は必死に視線を逸らし、歯を食いしばった。足ががくがくと震え、涙がこぼれそうになるのを必死にこらえた。コーチが「次から真剣にやれ。わかったな」と言い、罰は終わった。だが、その夜、壮太は布団の中で何度も同じ光景を思い返した。有紀に見られたこと。自分の裸を、彼女がはっきりと認識してしまったこと。それが、妙に胸の奥に残った。恥ずかしいはずなのに、どこかで「彼女だけは自分の体を知っている」という奇妙な所有感のようなものが芽生えていた。

それでも、壮太は教室を辞めなかった。有紀がいるからだった。

～途中割愛～

第四章 大学一年 秘密の恋人、そして男子更衣室

都内の私立大学。入学手続きを終え、二人はそれぞれ一人暮らしのアパートに引っ越した。

壮太の部屋は大学から自転車で十五分ほどのワンルーム。有紀の部屋はそこからさらに十分ほど離れた、同じような間取りのアパートだった。お互いの部屋を行き来するのは、入学前から決めていたことだった。最初の夜、有紀が壮太の部屋に荷物を運び込みながら「ここ、なんか落ち着くね」と笑った。引っ越し作業の合間に、二人は何度も体を重ねた。新しい生活の始まりに、興奮と安心が混じり合っていた。

大学の水泳部は、伝統が強く、体育会系の気風が濃かった。

入部説明会の日、部室に集まった新入生の数はそれなりに多かった。男子も女子も半々のバランスだった。有紀は選手として入部すると同時に、マネージャーを兼ねることになった。先輩からの指名で理由はわからなかったが、各学年に一人ずつマネージャーが置かれる慣例があり、一年生の枠を有紀が担う形になった。マネージャーは有紀を含めて四人。二年生、三年生、四年生に一人ずつ、計四人の女子が部の雑務を分担していた。

また水泳部は「付き合うのは二年生から」と先輩部員が1年生全員へ伝えた。

それが部のしきたりだった。一年生のうちは公私混同を避けるため、恋愛は禁止。表向きは厳格に守られていた。壮太と有紀は当然、関係を隠すことにした。部内では「ただの同級生」として振る舞い、練習後に二人きりになることも極力避けた。ただ、アパートではこれまで通り、互いの部屋を行き来し、体を重ねた。有紀が「部活では秘密ね」と指を立てて笑うたびに、壮太は妙な背徳感と、彼女だけを知っているという優越感を同時に味わった。

練習が本格的に始まったのは、入学からわずか数日後だった。

有紀は選手としての練習に参加する一方で、マネージャーとしての仕事もすぐに任された。先輩の水着やジャージの洗濯、用具の整理、そして更衣室の清掃。女子更衣室はもちろん、男子更衣室の清掃も含まれていた。

初めて男子更衣室に入ったのは、練習二日目の夕方だった。

有紀を含む女子マネ四人は、掃除道具を持って男子更衣室のドアを開けた。中はまだ湿気と塩素の匂いが残っていた。床に落ちた髪の毛や、ベンチに置き忘れられたタオルを片付け始めたところに、四年生の男子が二人、ずかずかと入ってきた。

「あ、マネか。悪いな、先に着替えるわ」

二人は女子マネがいることをほとんど気にせず、服を脱ぎ始めた。ジャージを下ろし、下着を下ろし、全裸になった。ちんぽを隠す素振りも見せない。一つはすでに半勃起しており、もう一つはぶら下がったままだった。太さ、長さ、色、形。小学校の水泳教室で見た幼いものと、まったく違う。成人の男のちんぽが、目の前で無造作に晒されている。

～途中割愛～

第五章 新歓コンパ編

新歓コンパの日は、入学からおよそ一ヶ月半が過ぎた金曜日の夜だった。

会場は大学から少し離れた居酒屋の個室。部員全員が集められ、長いテーブルが二本並んでいた。四年生が上座に座り、三年生、二年生、そして一年生が下座に並ぶ。やはり壮太が心配していた通り、伝統があり、有紀を含む女子マネージャー四人は、四年生の隣に座らされるのが慣例だった。壮太は一年生の席の端に座り、斜め前から有紀の姿がはっきり見える位置にいた。

女子マネージャーはさらに、新歓コンパの慣例でチアガールのコスプレをしていた。ミニスカートのポンポン、胸元の開いたトップス。ミニスカートの下はパンティだけで、座るたびに、立ち上がる

たびに、わずかに白い生地が覗く。他の女子部員も会場にいて、この光景を楽しむように見守っていた。

酒が回り始めると、空気は一気に緩んだ。四年生の部長・拓海が立ち上がり、グラスを掲げた。

「今年の一年生、しっかりやれよ。宴会芸、用意してあるよな？」

「はい！」

～つづく～